

友人関係におけるソーシャル・サポートの 入手－提供の互恵性と感情状態¹⁾

－知覚されたサポートと実際のサポート授受の観点から－

福 岡 欣 治

Reciprocity of receiving and giving support and emotional states in friendships:
From the perspectives of perceived and enacted supports

Yoshiharu FUKUOKA

問 題

本研究は、福岡（1997）と同じく大学生の友人関係におけるソーシャル・サポートの入手－提供の互恵性を知覚されたサポートと実際のサポート授受の観点から測定し、それらが友人関係における感情状態に及ぼす影響を検討しようとするものである。福岡（1997）との違いは、サンプル数をより大きくし、また感情状態の測定項目数を増やし指標を改善することで、その知見を補完しより確証性の高いものにしようとしている点にある。

ソーシャル・サポート研究と互恵性の視点

ソーシャル・サポート研究は対人関係と心身の健康との関係を探る 1 つの接点としての役割を果たしてきたが、従来は主として、サポートの受け手の立場から、生活ストレスに対する知覚されたあるいは実際に受けたサポートが心身の健康に対してどのような効果を示すのか、という観点からおこなわれるものが主流であった（例えば Cobb, 1976 ; Cohen & Syme, 1985 ; Cohen & Wills, 1985 ; Gottlieb, 1981 などを参照）。

しかし、ソーシャル・サポート研究で想定されている友人や家族などとのインフォーマルな対人関係においては、個人はサポートの受け手であると同時にその送り手でもあり得ると考えられる。事実、とりわけ 1980 年代後半に入ると、より能動的な意味でのサポートの送り手としての側面に目を向けることの必要性も指摘されるようになった（例えば Jung, 1987, 1988 ; 蜂屋, 1990 ; Lu & Argyle, 1992）。特に最近では、衡平理論（Walster, Walster, & Berscheid, 1978）を援用した、ソーシャル・サポートがやりとりされる関係の互恵性という観点からの研究もおこなわれてきている（例えば Acitelli & Antonucci, 1994 ; Antonucci, Fuhrer, & Jackson, 1990 ; Buunk, Doosje, Jans, & Hopstaken, 1993 ; Ingersoll-Dayton & Antonucci, 1988 ; 周・深田, 1996 ; Jung, 1990 ; Lu, 1997 ; Rook, 1987）。

¹⁾ 本稿は、著者らが関西心理学会第 108 回大会（1996）において口頭発表した内容の一部をまとめなおしたものである。

サポート関係の互恵性に関する先行研究とその問題点

ソーシャル・サポートがやりとりされる対人関係すなわちサポート関係の互恵性を扱った従来の研究は、多くの場合サポートがやりとりされる関係の互恵性が心理的適応にとって重要でありそこからの逸脱がネガティブな意味をもつという、衡平理論に見合ったおおむね共通の知見を提供している。例えば Rook (1987) は、夫と死別した高齢女性を対象に、友人および子どもとの関係におけるサポートの互恵性が関係満足度や孤独感に及ぼす影響を検討し、過剰利得でも過小利得でも孤独感が高まることを見出している。また周・深田 (1996) は、大学・短大等の学生を対象とした調査により、サポートの授受のバランスが過剰利得の場合には負債感が、過小利得の場合には負担感が高まることを報告している。

しかしながらこれらの研究は、知覚されたサポートと実際のサポートの受容という、従来のソーシャル・サポート研究で指摘されてきた (例えば Barrera, 1986) 主要な操作化の区別に十分配慮しているとはいえず、サポートの受け手としての認知や経験と送り手としての認知や経験を同時に検討する、という点で十分とはいえないと思われる (福岡, 1997)。例えば Rook (1987) は、社会的ネットワーク査定の方法 (McCallister & Fisher, 1978) に倣って種々のサポート機能の入手・提供に当てはまる人の有無をたずね、該当者が存在する機能の多少によって互恵的か否かを評価している。しかし、実際にサポートがやりとりされた経験や出来事については問うておらず、各機能の該当者の人数や実際にそれらの機能がどの程度満たされているのかも問題にしていなため、結果的にここでの指標は単なる機能別の対人関係が「存在するか否か」しか表していない。また Buunk et al. (1993) は、上司や同僚との関係が互恵的か否かを回答者に直接評価させているが、この方法は互恵性の認知そのものを独立変数としてそれが感情状態に及ぼす影響を考察するには有効であり得ても、実際のサポートのやりとりやその入手・提供の可能性の認知がどのようなものであるのかについての情報を与えてくれるものではなく、両者を区別し得るものでもない。

なお周・深田 (1996) は、認知レベルの知覚されたサポートの互恵性は行動 (実行) レベルの互恵性に基いた予測ないし期待であり、互恵性の検討には後者による測定が適切であると述べている。しかし、彼女らの研究では過去3ヶ月間という長期間を遡ってのサポートの授受を35項目で測定しており、日常的なサポート授受としては想起の正確さに疑問が残ることと、それらが単一のストレス状況によるものとは思えないにもかかわらず極めて高い内部一貫性を得ていること、また概念的に異なるはずの他者から求められたサポートと自分自身が受けたサポート、他者に提供したサポートと自分が求めたサポートの間にも0.70以上の高い相関がみられ、指標としての弁別性に疑問の余地があること等からみて、彼女らの測定していたものは実際には認知レベルのサポートに極めて近く、現実のサポート授受を十分に反映したものでなかった可能性が高い (福岡, 1997)。

福岡 (1997) の研究とその結果

以上のような問題意識から、福岡 (1997) は、サポートの入手と提供を認知レベル (入手可能性と提供可能性) と実行レベル (実際のサポートの入手量と提供量) を区別し、その両面からとらえることを試みた。すなわち、親しい友人との関係について、実行レベルのサポート授受はサポート受容の測度として著名な ISSB (Inventory of Socially Supportive Behaviors: Barrera, Sandler, & Ramsey, 1981) に合わせ過去1ヶ月間について実際の入手量と提供量を測定し、認知レベルについてはサポートが得られる (あるいは与えられる) と思うかを想定させた。そして、

認知レベルと実行レベルそれぞれの入手－提供の対応性とそのズレが友人関係における感情状態に及ぼす影響を、男女大学生を被験者として検討した。なお友人関係に限定したのは、Rook (1987)、Buunk et al. (1993) において友人や同僚といった義務的な性質の弱い関係の方が互恵性の影響を受けやすいことが示唆されているためであった。

その結果、認知レベルでは提供可能性が入手可能性を上回るいわゆる過小利得にあたる群の方が両者が同レベルないし逆に入手可能性が提供可能性を上回る群に比べて心理的な負担感(重荷や欲求不満の感情)が強いこと、また男子のみではあるが入手可能性が提供可能性を上回るいわゆる過剰利得にあたる群では他の2群に比べ心理的な負債感(恥ずかしさや申し訳なさの感情)が強いことが見いだされ、互恵性からの逸脱がネガティブな影響を及ぼすという衡平理論からの予測に沿った結果が得られた。しかし、実行レベルに関しては、提供量と入手量の一致ないしズレは、感情状態に何ら有意な影響を及ぼしていなかった。なお認知レベルに関しては、女子の場合に心理的負債感で群間の有意差が見られず、入手可能性が提供可能性を下回る場合に関係の満足度が低下するなど男子と異なる特徴も認められた。これらの結果は、認知レベルと実行レベルのサポートを操作的に明確に区別した場合には、感情状態に対する互恵性の影響がもたら認知レベルのサポートにおいて認められること、および互恵性とその影響に男女差が存在することを指摘するものである。また、実行レベルでの互恵性の効果を問題にする場合には単に一定期間内のサポートの入手量・提供量の多少をとらえるだけでは不十分であり、例えば受け手の経験するストレス状況等、サポートのニーズに関わる変数を考慮すべきであることを示唆している(福岡, 1997)。

福岡(1997)の問題点と本研究の目的

しかしながら福岡(1997)の研究は、サンプル数が男女合わせても120名と非常に少なく、また従属変数である感情状態の指標が、心理的負担感と負債感については各2項目、関係満足度については1項目という少数の項目のみで測定されているなどの問題点を有している。負担感、負債感の項目内容に関してはLu & Argyle (1992)の先行研究に準拠しているとはいえ、例えば衡平理論の検証を目的とした研究(例えば諸井, 1989)ではより多くの項目を用いて多面的な検討がおこなわれている。これらの要因が結果に影響した可能性は否定できず、認知レベルと実行レベルの区別に関する結論をややもすれば曖昧なものにしている。

そこで本研究では、福岡(1997)の知見を補完し追証することを目的とし、①調査対象サンプルをより大きなものにする、②感情指標の内容をより多くの項目を用いて測定すること、の2点を改善する。その上で、福岡(1997)と同様に、友人関係におけるサポートの入手と提供を認知レベル(入手可能性と提供可能性)と実行レベル(実際のサポートの入手量と提供量)の両面からとらえ、それぞれの入手－提供の対応関係、および両者のズレが個人の感情状態に及ぼす影響を検討する。また、福岡(1997)で見いだされたような互恵性の影響の男女差に関しても、同様の結果が得られるかどうか併せて検討する。

方 法

被調査者

D大学の大学生計233名(女子129名、男子104名)を被調査者とした。平均年齢は18.85歳(SD = 0.88)であった。

測定内容

ソーシャル・サポート 福岡（1997）と同じ9項目を用いた。これらは久田・千田・箕口（1989）、福岡・橋本（1993）などで用いられている項目を参考にして作成されたものであり、なぐさめやはげまし、愚痴を聞く、相談にのるなどのサポート行動からなる（付録1参照）。

測定方法としては、現在親しくしている同性の友人たちとの関係を思い浮かべてもらい、まず認知レベルのサポートとして、友人たちにそれぞれの行動をどれくらいしてもらえと思うか（入手可能性）、自分ではどれくらいしてあげられると思うか（提供可能性）を回答させた。さらに実行レベルのサポートとして、同じ友人たちとの関係について、過去1か月間で自分がそれらの行動をどれくらいしてもらったか（入手量）、自分はどれくらいしてあげたか（提供量）についても回答を求めた。評定は全て6段階（1.全然…ない（なかった）～6.たいへん…ある（あった））とした。これはSSQ（Sarason, Levine, Basham, & Sarason, 1983）と同様であり、福岡（1997）の5段階より若干詳細な評定を得ることを意図したものである。得点化にあたっては福岡（1997）と同様に9項目の平均値を算出した。各指標におけるCronbachの α 係数はいずれも0.80以上であった。

サポート関係における対人感情 満足感（5項目）、負担感・苛立ち（3項目）、心理的負債感（2項目）の3側面から測定した。これらは、同性親友との関係に対する衡平理論の適用を試みた諸井（1989）において用いられた項目に準拠しつつ福岡（1997）の測定内容も加えた16項目から、項目間相関と因子構造に基づいて選択されたものである（具体的な項目内容と因子分析結果については付録2を参照）。なお結果的に、心理的負債感の項目内容は福岡（1997）とほぼ同様であった。

測定方法としては、先のサポート授受を回答する際に思い浮かべた現在親しくしている友人との関係について「それらの（サポートの）やりとりをふまえて、どの程度以下のような気持ちになりますか」と問い、それぞれの項目を提示して「1.全くそうでない」から「6.たいへんそうである」までの6段階で評定させた。得点化にあたっては各項目への評定の平均値を用いた。Cronbachの α 係数は、2項目のみの心理的負債感では0.56であったが、他の2つはいずれも0.80以上であり、使用に耐えうるものと判断された。

実施方法

D大学での心理学関連科目の受講者に対して、授業中に質問紙を配布・説明して協力を依頼し、2週間以内に提出させた。調査の実施時期は1995年6月であった。

結果と考察

Table 1に各指標の平均値と標準偏差、男女差のt検定結果を示す。以下、サポートの入手-提供の互惠性と感情状態に対するその影響に焦点を当てるため、福岡（1997）と同様の手順により、①サポート入手-提供の量的な対応関係、②サポート諸指標間の相関関係、および③サポート入手-提供の互惠性が感情状態に及ぼす影響、の3点について順次それぞれの分析結果を示し、福岡（1997）およびその他の関連研究と対比させながら考察していく。

Table 1 各指標の平均値とSD、男女差

指 標	男 子		女 子		t 値
	平均	SD	平均	SD	
(サポート)					
入手可能性	4.20	0.81	4.62	0.70	4.22 **
提供可能性	4.19	0.81	4.54	0.61	3.70 **#
入手量	3.03	1.12	3.53	0.93	3.63 **#
提供量	3.16	0.95	3.64	0.76	4.14 **#
(感情状態)					
満足感	4.36	0.89	4.67	0.85	2.64 **
負担感・苛立ち	1.72	0.77	1.77	0.91	0.46
心理的負債感	2.21	1.12	2.36	1.13	1.01

#分散の男女差のため Welch の検定をおこなった (df = 188 ~ 199)

** p < .01

サポート入手-提供の量的な対応関係

認知レベルのサポートの入手可能性と提供可能性、および実行レベルの入手量と提供量がそれぞれ量的に対応しているか否かを検討するため、入手可能性と提供可能性、入手量と提供量をそれぞれ被験者内要因、性別を被験者間要因とする2通りの2要因分散分析をおこなった。その結果、認知レベルでは性別の主効果(女<男)のみが有意であり(F(1,231) = 17.48, p < .001)、他の2つの効果は有意ではなかった(入手-提供の主効果はF(1,231) = 1.30、交互作用は同じく0.70、いずれもn.s.)。実行レベルでは、認知レベルと同様の性別の主効果(F(1,231) = 27.19, p < .001)がみられたほか、提供量-入手量の関係が有意であったが(F(1,231) = 3.92, p < .05)、得点そのものの差異は必ずしも大きなものではなかった。交互作用は有意ではなかった(F(1,231) = 0.03, n.s.)。

これらの結果は、まず第一に親しい友人関係において認知レベルでのサポートが互恵的なものであることを示している。福岡(1997)では男子の場合に提供可能性、提供量が入手可能性、入手量をそれぞれ上回っていたが、本研究ではそうした結果はみられなかった。むしろ本研究では実行レベルでは女子においても男子と同様に提供量が入手量を上回るという結果であった。この点については、たとえば福岡(1997)でも有意ではないものの得点自体は女子でも提供量の方が多くなっており、基本的には本研究と福岡(1997)の結果との間に本質的な違いはないと考えることもできるかもしれない。ただ、ではなぜ実行レベルにおいてのみ提供量が入手量を有意に上回るのか、ということに関しては、福岡(1997)でおこなわれたストレス事態におけるコーピング方略の違い(男性では独力での対応が求められがちであるのに対し、女性では他者の援助を求めることが許容されやすい; Barbee, Cunningham, Winstead, Derlega, Guley, Yankeelov, & Druen, 1993)からの解釈は妥当性を欠くことになる。サンプルやその大きさの違い等に帰着できるのか

どうか、今後改めて検討が必要であるように思われる。

なお、認知レベルおよび実行レベルでのサポート得点の男女差に関しては、多くの先行研究（例えば Burda, Vaux, & Schill, 1984 ; Burke & Weir, 1978 ; Flaherty & Richman, 1989 ; Slavin & Rainer, 1990 ; Wohlgemuth & Betz, 1991; 福岡・橋本, 1995）において女性が男性を上回るという結果が報告されており、本研究もそれらに一致しているといえる。

サポート諸指標間の相関関係

次に、サポートの入手－提供の相互関係を検討するため、入手可能性、提供可能性、入手量、提供量の4指標間におけるピアソン相関係数を男女別に算出した（Table 2）。

Table 2 サポート指標間の相関係数
（上段：男子、下段：女子）

サポート指標	認知レベル		実行レベル	
	入手	提供	入手	提供
（認知レベル）				
入手（可能性）	-----	.70**	.51**	.51**
提供（可能性）	.60**	-----	.35**	.56**
（実行レベル）				
入手（量）	.55**	.41**	-----	.45**
提供（量）	.26**	.34**	.57**	-----

** p < .01 *p < .05

その結果、認知レベルでのサポートの入手可能性－提供可能性の相関が男女ともに最も高かった。実行レベルでの入手量－提供量は、とりわけ男子では相対的により低いものであった。またその他の指標間の相関係数については、男女ともに入手可能性－提供可能性の相関よりも低かった。

これらの結果はまず、認知レベルにおけるサポートの入手可能性と提供可能性の間に強い対応関係が存在することを示している。先の量的な対応関係はあくまで平均値のレベルでの互恵性であったが、相関係数の高さは個人においてより多くサポートが入手可能であると認知しているほどより多く提供可能であると認知していることを意味している。福岡（1997）でも同様の結果が得られており、認知レベルでは親しい友人との関係においてサポート授受の互恵性が成立していることが明らかである。

一方、実行レベルでの入手量と提供量の相関は、あくまで相対的にはあるがサポートの入手－提供の互恵性が認知レベルほどは成立していないことを示唆する。福岡（1997）や周・深田（1996）では本研究に比べるとより高い相関関係が見いだされているが、実際のサポート提供がおこなわれる際には受け手に何らかのニーズが生じているはずであり、少なくとも短期間には友人関係の双方が同じレベルのニーズを生じることは考えにくい。したがって、実行レベ

ルの方がより入手-提供の相関が低いという本研究の結果の方が妥当であると考えられる。ただし事後的な解釈であり、今後さらに検討を重ねていく必要はあると思われる。

なお、概念的な関連性の低いその他の指標間の相関が低かったことは、操作化にあたっての指標の弁別性が保持されていることを示唆するものといえる。

サポート入手-提供の互恵性が感情状態に及ぼす影響

認知レベルのサポートの入手可能性と提供可能性、および実行レベルの入手量と提供量のそれぞれが互恵的か否かが友人関係における感情状態に及ぼす影響を検討するため、入手可能性と提供可能性、入手量と提供量のズレによって被験者を男女それぞれ3群に分割し、各感情指標について性別との2要因分散分析をおこなった。ここで、被験者群の分割にあたり実行レベルで入手量と提供量のズレが有意であった点を考慮し、福岡(1997)と同様に、それぞれのサポート得点を標準化した上で、入手可能性と提供可能性ないし入手量と提供量のズレがほぼ0である群(以下「入手≒提供」群)と、入手可能性ないし入手量の得点が相対的に高い群(以下「入手>提供」群)、および提供可能性ないし提供量の得点が高い群(以下「入手<提供」群)という3つの群を設定した。なお、後者の2群は、衡平性の観点からはそれぞれ過剰利得、過小利得の状態に対応しており、ズレがほぼ0である群が平等な状態とみなすことができる。

認知レベル(入手可能性-提供可能性) 分割後の3群における標準化後の入手可能性-提供可能性のズレの平均値は、「入手≒提供」群が-0.02、「入手>提供」群が0.64、「入手<提供」群が-0.67であり、群間に明瞭な差異がみられた(性別との2要因分散分析における群の主効果は $F(2,227)=255.99, p<.001$)。性別の主効果と交互作用はいずれも有意ではなかった(それぞれ $F(1,227)=2.34$ と $F(2,227)=0.06, n.s.$)。

3つの感情指標に関する2要因分散分析の結果、いずれも群の主効果が有意ないし有意傾向であった(満足感では $F(2,227)=3.17, p<.05$ 、負担感・苛立ちでは同じく $2.50, p<.10$ 、心理的負債感では同じく $3.02, p<.10$)。Figure 1に示すとおり、満足感では「入手≒提供」群の得点が最も高く、「入手>提供」群、「入手<提供」群の順であった。負担感・苛立ちと心理的負債感では逆に「入手≒提供」群の得点が最も低く、前者では「入手<提供」群、後者では「入手>提供」群の得点が最も高かった(ただしTukey法の多重比較で他群との間に有意差が認められたのは満足感のみであった)。

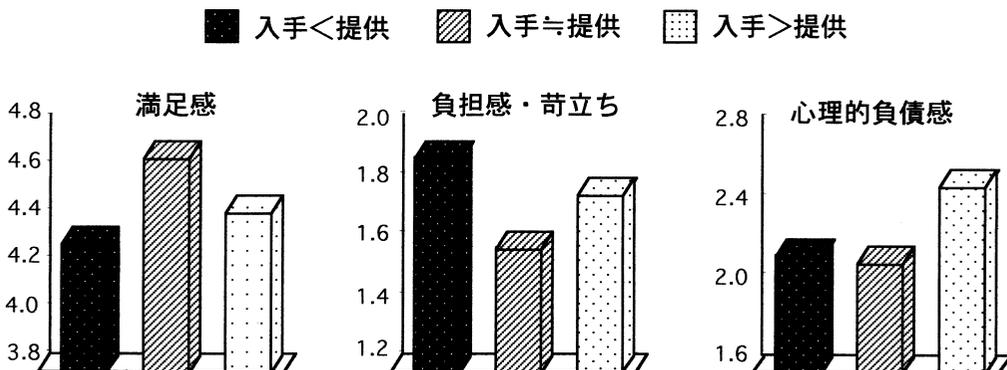


Figure 1 認知レベルでのサポート入手-提供の対応性と感情状態

なお満足感では交互作用も有意であり ($F(2,227) = 3.59, p < .05$)、女子では「入手<提供」群が他の2群よりも低得点であったのに対し、男子では逆に「入手>提供」群の方が得点のみが低かった (Figure 2)。

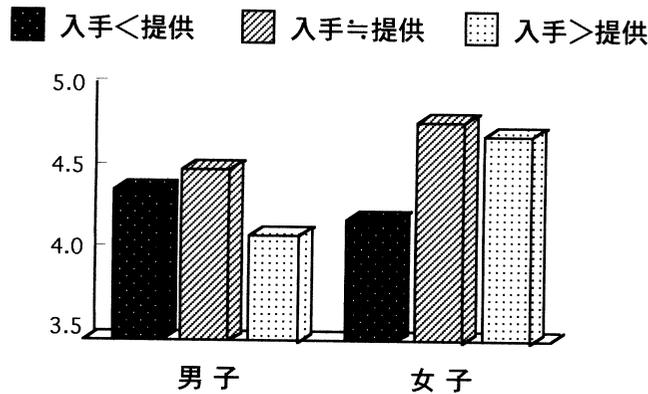


Figure 2 認知レベルでのサポート入手-提供の対応性と性別による満足感の違い

これらの結果は、親しい友人との関係における認知レベルのサポートの入手可能性と提供可能性が対応しているか否かによってその友人関係における感情状態が異なること、とりわけそれがおおむね平衡理論からの予測およびサポートの互恵性に関する先行研究の知見に見合ったものであることを示している。すなわち、最も互恵的である「入手≒提供」群が満足感最も高く、負担感・苛立ちや心理的負債感は最も低い。過小利得にあたる「入手<提供」群では負担感・苛立ちが高く、過剰利得にあたる「入手>提供」群では心理的負債感が高いのである。これらの結果は、総じてサポート関係の互恵性に関する先行研究の知見に一致し、かつ福岡 (1997) と比べても相対的により明瞭なものといえる。

実行レベル(入手量-提供量) 分割後の3群における標準化後の入手量-提供量のズレの平均値は、「入手≒提供」群が-0.02、「入手>提供」群が0.90、「入手<提供」群が-0.97であり、群間に明瞭な差異がみられた (性別との2要因分散分析における群の主効果は $F(2,227) = 133.30, p < .001$)。性別の主効果と交互作用は有意水準には達していなかった (それぞれ $F(1,227) = 0.10, n.s.$ と $F(2,227) = 2.94, p < .10$)。

3つの感情指標に関する2要因分散分析の結果は、総じて認知レベルよりも複雑であり、入手量と提供量の対応ないズレによる一貫した効果は見いだされなかった。満足度に関しては性別、群、交互作用のすべてが有意であり (それぞれ $F(1,227) = 7.67, F(2,227) = 6.14, F(2,227) = 7.15$, いずれも $p < .01$)、男子では群の効果が全くみられず、女子では「入手<提供」群のみが低得点であった。負担感・苛立ちに関しては交互作用のみが有意であり ($F(2,227) = 5.90, p < .01$)、女子では「入手<提供」群が高得点であったが男子では逆の傾向を示した (以上 Figure 3 を参照)。

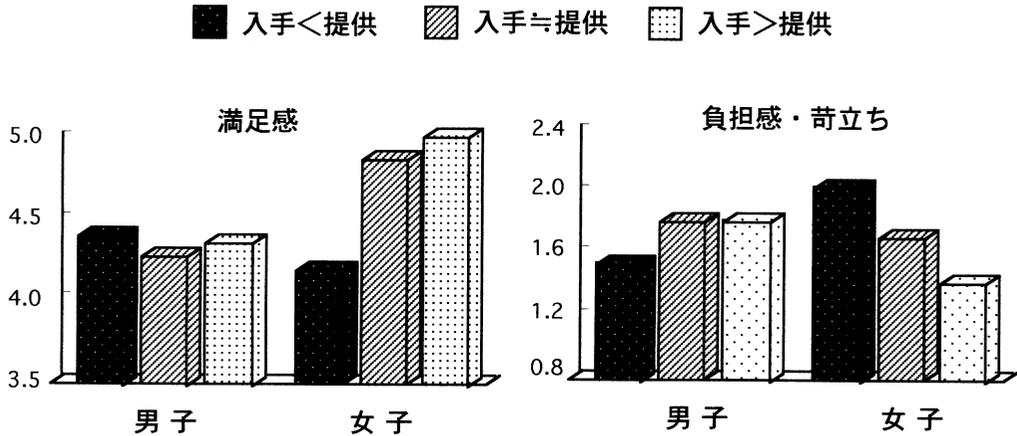


Figure 3 実行レベルでのサポート入手-提供の対応性と性別による満足感および負担感・苛立ちの違い

なお、心理的負債感では群の主効果のみが有意傾向に達しており ($F(2,227)=2.37, p<.10$)、「入手>提供」群が他の2群に比べ若干高得点であった (Figure 4 を参照)。ただし Tukey 法の多重比較では群間の有意差はみられなかった。

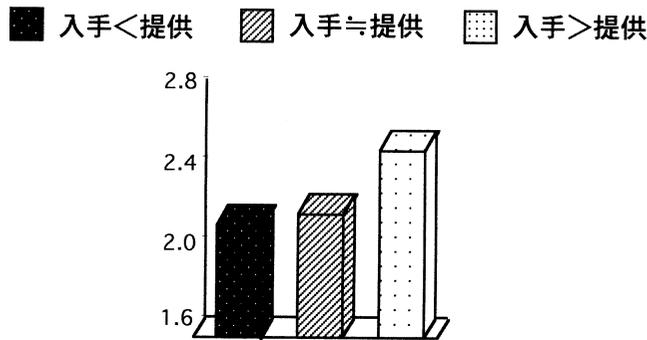


Figure 4 実行レベルでのサポート入手-提供の対応性と心理的負債感 (男女こみ)

これらの結果は、友人関係における実行レベルのサポートの入手量と提供量の対応ないズレが、感情状態に一貫した影響を及ぼしていないことを示している。女子では若干入手量の多さによる影響があるようにも若干は見受けられるが、3つの指標を通して一致した結果というわけではない。少なくとも互恵的であることが好ましくそこからのズレがネガティブな影響を及ぼす、という衡平理論からの予測や先行研究に見合った結果は全く得られておらず、その方面からの解釈は不可能である。この点において、福岡 (1997) の結果とも基本的に一致するものといえよう。

以上のような認知レベルと実行レベルでの結果を総合すると、サポート入手—提供の互恵性が感情状態に及ぼす影響は、前者すなわち認知レベルにおいてのみ顕著にみられるといえる。これは福岡（1997）の報告と基本的に一致しており、かつ相対的により明瞭な結果である。親しい友人との関係においては、認知レベルでのサポート授受の互恵性が成立している、言い換えれば相手がもしも必要とするならば一定レベルのサポートが提供でき、同時に自分がもしも必要とするならば相手から同じようなサポートを得ることができると思える（あるいは相手が必要としないならサポートを提供することはなく、また自分が必要としないなら相手からサポートを受けることはない）ならば、その関係について満足感を感じることができ、また心理的な負債感や負担感・苛立ちといったネガティブな感情をもたなくてすむということができよう。

一方、実行レベルに関してはサポート入手—提供の互恵性は感情状態に一貫した影響を及ぼしていなかった。福岡（1997）においてすでに指摘されているように、実際のサポートの授受が生じるには、その潜在的な受け手がストレス状況に直面する（あるいは、少なくとも送り手がそう認知する）ことが条件となる（Barrera, 1986, 1988; Cohen, 1988, 1992; Shmaker & Brownell, 1984等を参照）。個人が一定期間内に直面するストレス状況が量的あるいは質的に一致するということは考えにくく、それゆえ親しい友人同士の関係であっても、双方のサポートのニーズが（とりわけ比較的短い）同一の期間内で対応する必然性はないはずである。確かに親しい友人関係であれば、相手がサポートを提供してくれれば今度は自分も同じようにしてあげたいと思うであろうし、また自分がサポートを提供すれば今度は相手も同じようにしてくれると思うであろうが、厳密な意味で比較的短い一定期間内で実行レベルのサポートの入手量と提供量が対応するというのはかなりの程度偶然にすぎない。その意味で、単にサポートの入手量と提供量が対応している、あるいは両者の間にズレがあるというだけでは、親しい友人関係における感情状態を左右する要因にはなりにくいであろう。もちろん長期的な意味での互恵性は良好な関係を維持していく上で不可欠であろうが、ある一定期間内でのサポートの授受は、常に同時期ではなく、むしろそれ以降の期間において徐々に補償されていくはずである。もしも単にサポートの入手量と提供量の多寡を問題にするならば、そこまでの長期的な視点を含みつつ、現実のサポート授受の実態を正しく反映するような測定方法を工夫する必要があるように思われる（福岡, 1997を参照）。

なお、互恵性が感情状態に及ぼす影響の男女差という観点から本研究の結果をみると、総じて福岡（1997）に比べ明瞭ではなかった。満足感については女子では入手可能性が高い場合、男子では提供可能性が高い場合に互恵的な場合と同レベルであるという結果が得られたが、ネガティブな感情状態についてはそうではなかった。福岡（1997）では（認知レベルのみであるが）ネガティブな感情状態については主として男子においてのみ互恵性の影響があり、例えば女子では友人関係において情緒的な表出性が高く相互依存性が強い（Parker & de Vries, 1993）といった観点からの解釈が可能であった。今回の結果はその解釈とは相容れないが、それをサンプル数や測定項目の違いにのみ帰着できるという証拠は十分ではなく、今後の検討を要する問題であると思われる。

総 括

本研究の主要な目的は、サンプル数および感情指標の項目数の少なさという福岡（1997）の問題点を改善しつつ、友人関係におけるサポートの入手と提供を認知レベル（入手可能性と提供可能性）と実行レベル（実際のサポートの入手量と提供量）の両面からとらえ、それぞれの入手－提供の対応関係、および両者のズレが個人の感情状態に及ぼす影響性を検討することであった。結果は、サポート入手－提供の対応関係は認知レベルにおいてより明確にみられ、また両者のズレが感情状態に及ぼす影響も認知レベルのサポートにおいてみられるという福岡（1997）の結果を再現し、むしろより明確にするものであった。実行レベルについては認知レベルに比べ相対的に入手－提供の対応関係が不明瞭であり、互恵性が感情状態に及ぼす影響も一貫していなかった。このことは、福岡（1997）が考察しているように、サポート関係の互恵性に関する従来の研究では認知レベルと実行レベルのサポートというソーシャル・サポート研究における主要な操作化の区別が十分意識されていなかったこと、および実行レベルでの互恵性の効果を問題にする場合には単に一定期間内のサポートの入手量・提供量の多少をとらえるだけでは不十分であり、例えば受け手の経験するストレス状況等、サポートのニーズに関わる変数を考慮すべきであることを改めて示唆するものといえる。

しかしながら、本研究の結果を批判的に振り返るならば、認知レベルの入手可能性と提供可能性のズレが感情状態に及ぼす影響は、負担感・苛立ちおよび心理的負債感に関しては10%水準にとどまっておらず、決して顕著というわけではなかった。また、本研究の副次的な目的であった互恵性とその影響における男女差に関する結果は、福岡（1997）と必ずしも全面的に対応するものではなかった。これには、例えば方法論的な観点から、感情指標の項目数が負担感・苛立ちでは1項目増えたのみ、心理的負債感については実質的に福岡（1997）と同じ項目数であったこと、あるいは評定方法を6段階としたことが逆に回答の信頼性を減じた可能性、サンプル数を福岡（1997）の約2倍弱まで拡大したがこれが十分であったのかどうか、等を指摘することができよう。さらに、より本質的な問題として、実行レベルのサポート授受の互恵性を単に入手量、提供量の多少によってとらえることが不適切であるならば、潜在的な受け手におけるサポートのニーズ、送り手によるそのニーズの推測ないし把握といった観点を測定に盛り込む必要がある。これら様々な問題点を改善し継続的な検討をおこなうことによって、サポート授受の互恵性に関連する現象をよりよく理解することができると思われる。

謝 辞

本調査にご協力くださった学生の皆さん、また本研究の実施ならびにデータ分析にあたってご援助を賜りました同志社大学文学部の橋本宰教授に対し、記して深く感謝いたします。

文 献

Acitelli, L. K., & Antonucci, T. C. 1994 Gender differences in the link between marital support and satis-

- faction in older couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 688-698.
- Antonucci, T. C., Fuhrer, R., & Jackson, J. S. 1990 Social support and reciprocity : A cross-ethnic and cross-national perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, **7**, 519-530.
- Barbee, A. P., Cunningham, M. R., Winstead, B. A., Derlega, V. J., Gulley, M. R., Yankeelov, P. A., & Druen, P. B. 1993 Effects of gender role expectations on the social support process. *Journal of Social Issues*, **49** (3), 175-190.
- Barrera, M., Jr. 1986 Distinction between social support concepts, measure, and models. *American Journal of Community Psychology*, **14**, 413-445.
- Barrera, M., Jr. 1988 Models of social support and life stress. In L. H. Cohen (Ed.) *Life events and psychological functioning*. Newbury Park: Sage. Pp.211-236.
- Barrera, M., Jr., Sandler, I. N., & Ramsey, T. B. 1981 Preliminary development of a scale of social support: Studies on college students. *American Journal of Community Psychology*, **9**, 435-447.
- Burda, P. C., Jr., Vaux, A., & Schill, T. 1984 Social support resources : Variation across sex and sex roles. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **10**, 119-126.
- Burke, R. J., & Weir, T. 1978 Sex differences in adolescent life stress, social support, and well-being. *Journal of Psychology*, **98**, 277-288.
- Buunk, B. P., Doosje, B. J., Jans, L. G. J. M., & Hopstaken, L. E. M. 1993 Perceived reciprocity, social support, and stress at work: The role of exchange and communal orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 801-811.
- Cobb, S. 1976 Social support as a moderator of life stress. *Psychosomatic Medicine*, **38**, 300-314.
- Cohen, S. 1988 Psychological models of the role of social support in the etiology of physical disease. *Health Psychology*, **7**, 269-297.
- Cohen, S. 1992 Stress, social support, and disorder. In H. O. F. Veiel & U. Baumann (Eds.) *The meaning and measurement of social support*. New York: Hemisphere. Pp. 109-124.
- Cohen, S. & Syme, S. L. (Eds.) 1985 *Social support and health*. Orland: Academic Press.
- Cohen, S., & Wills, T. A. 1985 Social support and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, **98**, 310-357.
- Flaherty, J., & Richman, J. 1989 Gender differences in the perception and utilization of social support: Theoretical perspectives and an empirical test. *Social Science and Medicine*, **28**, 1221-1228.
- 福岡欣治 1997 友人関係におけるソーシャル・サポートの入手と提供—認知レベルと実行レベルの両面からみた互惠性とその男女差について— 対人行動学研究, **15**, 1-12.
- 福岡欣治・橋本 幸 1993 クラスター分析によるサポート内容の分類とその効果 日本心理学会第57回大会発表論文集, 157.
- 福岡欣治・橋本 幸 1995 大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康の関係 教育心理学研究, **43**, 185-193.
- Gottlieb, B. H. (Ed.) 1981 *Social networks and social support*. Beverly Hills: Sage.
- 蜂屋良彦 1990 ソーシャル・サポートと適応 日本社会心理学会第31回大会発表論文集, 54-55.
- 久田 満・千田茂博・箕口雅博 1989 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み (1) 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 143-144.

- Ingersoll-Dayton, B., & Antonucci, T. C. 1988 Reciprocal and nonreciprocal social support: Contrasting sides of intimate relationships. *Journal of Gerontology*, **43**, S65-73.
- 周 玉慧・深田博己 1996 ソーシャル・サポートの互恵性が青年の心身の健康に及ぼす影響
心理学研究, **67**, 33-41.
- Jung, J. 1987 Toward a social psychology of social support. *Basic and Applied Social Psychology*, **8**, 57-83.
- Jung, J. 1988 Social support providers: Why do they help? *Basic and Applied Social Psychology*, **9**, 231-240.
- Jung, J. 1990 The role of reciprocity in social support. *Basic and Applied Social Psychology*, **11**, 243-253.
- Lu, L. 1997 Social support, reciprocity, and well-being. *Journal of Social Psychology*, **137**, 618-628.
- Lu, L. & Argyle, M. 1992 Receiving and giving support: Effects on relationships and well-being. *Counseling Psychology Quarterly*, **5**, 123-133.
- McCallister, L., & Fisher, C. S. 1978 A procedure for surveying personal networks. *Sociological Methods and Research*, **7**, 131-148.
- 諸井克英 1989 対人関係への衡平理論の適用(2)―同性親友との関係における衡平性と情動的状态― 実験社会心理学研究, **28**, 131-141.
- Parker, S., & de Vries, B. 1993 Patterns of friendship for women and men in same and cross-sex relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, **10**, 617-626.
- Rook, K. S. 1987 Reciprocity of social exchange and social satisfaction among older women. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 145-154.
- Sarason, I. G., Levine, H., Basham, R. B., & Sarason, B. R. 1983 Assessing social support: The Social Support Questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, **49**, 469-480.
- Shumaker, S. A., & Brownell, A. 1984 Toward a theory of social support : Closing conceptual gaps. *Journal of Social Issues*, **40** (4), 11-36.
- Slavin, L. A., & Rainer, K. L. 1990 Gender differences in emotional support and depressive symptoms among adolescents: A prospective analysis. *American Journal of Community Psychology*, **18**, 407-421.
- Walster, E., Walster, G. W., & Berscheid, E. 1978 *Equity : Theory and research*. Boston: Allyn & Bacon.
- Wohlgemuth, E., & Betz, N. E. 1991 Gender as a moderator of the relationships of stress and social support to physical health in college students. *Journal of Counseling Psychology*, **38**, 367-374.

[1999年10月28日受理]

付録1 ソーシャル・サポートの測定項目

-
- 1) 落ち込んでいるとき、元気づける
 - 2) 頭を悩ませているとき、冗談を言ったりして気をまぎれさせる
 - 3) わからないことがあるとき、一緒になって考える
 - 4) 困ったことがあったとき、相談にのる
 - 5) 精神的なショックで動揺しているとき、なぐさめる
 - 6) 何か決めなくてはいけないとき、アドバイスする
 - 7) いらいらしたり腹立たしいことがあったとき、愚痴を聞く
 - 8) 不安になっているとき、励ます
 - 9) 気晴らしになるようなことを一緒にする
-

付録2 感情状態に関する項目の因子分析結果（主成分解、バリマックス回転）

Item	Factor 1	Factor 2	Factor 3	Communality
<u>満足感</u>				
幸せだと思う	.82	-.18	.05	.71
喜びを感じる	.78	-.16	.01	.64
満足感を感じる	.77	-.17	-.05	.63
うれしく思う	.77	-.25	.08	.66
楽しい気持ちになる	.76	-.01	-.28	.66
<u>負担感・苛立ち</u>				
腹立たしい気持ちになる	-.18	.87	.10	.80
憤りを感じる	-.15	.83	.12	.73
重荷を感じる	-.21	.82	.12	.72
<u>心理的負債感</u>				
申しわけなく思う	.01	.11	.90	.83
恥ずかしく思う	-.06	.17	.86	.77
Eigenvalue	3.16	2.30	1.69	
Explained variance (%)	31.56	22.99	16.85	71.40 (Cum.)